

野生動物の命を無駄にしない方法について

3年1組7番 梅本快

3年5組35番 矢追圭佑

keyword: 「ジビエ」「獣害」「野生動物」「ハンター」「森林」

1. はじめに

野生動物による被害、いわゆる「獣害」は、人間と野生動物との関係を語る上で外せるものではない。クマによる人身被害なども思い浮かぶが、やはり注目すべきは農作物や木の表皮を傷つけることで農産業、林業に多大な影響を与えている点である。農産業の分野において、令和3年度には全国で合計155億円と甚大な被害が出ている。獣害は経済に悪影響を及ぼすだけでなく、農作物を育てても野生動物に荒らされてそれらを売ることができない農家が離農を選択する原因にもなり得る問題で、高齢化などの課題も抱えている農産業に、さらなる打撃を与える要因となっている。生駒市においては、獣害対策として生駒市農林課が、市内各地に罠を設置している。ただしほとんどの場合は、罠にかかった野生動物は埋めて処分されていると生駒市職員の方に伺った。我々はここに疑問を感じた。本来野生動物の命は、食物連鎖の中で循環しているはずである。それを崩してしまっていることは、「いのちの輝き」を損なうことに繋がるのではないだろうか。とはいえ、獣害が無視できない問題であることも事実である。私たちは獣害対策に取り組みつつ、野生動物の命を無駄にしない方法について探究した。

2. 序論

まず、獣害対策に取り組まなければならない理由を確認しておきたい。私たちは主に以下の理由から獣害が深刻な問題になっていると考えた。

・捕食者の不在

日本ではシカやイノシシの天敵となるオオカミが絶滅しており、自然界でシカやイノシシの増加を抑える捕食者の役割が欠けている。これにより、獣害は人間が対策しなければならない問題である。

・狩猟者の減少

日本の狩猟免許所持者数は減少傾向が続いており、昭和55年度には460,800人いた狩猟者は、平成30年度には207,300人まで減少している。また狩猟免許所持者の高齢化も進んでおり、平成30年度においては約59%が60歳以上であり、18～29歳は全体の約4%となっている。

以上から、獣害の根本的な解決には狩猟数を増やす必要があると考える。

私たちは、獣害対策のために捕獲した野生動物を「ジビエ」として利用することで目的を達成できると考えた。ジビエとは野生動物の食肉のことである。ジビエの需要が高まれば、獣害対策で駆除された野生動物がゴミとして埋めて処分されることなく利用できる。野生動物の増加を抑えつつも、命を無駄にせず、なおかつ利益を生み出せる。そこで、私たちが目標に設定したのが「ジビエを流行らせる」ことである。

3. 本論

①いこま未来Lab

ジビエを流行らせるために「いこま未来Lab」に参加した。いこま未来Labは、生駒市が主催する「生駒市をフィールドに、地域のカッコいい大人や大学生メンターとともに、自分たちで企画したプロジェクトにチャレンジする実践型ワークショップイベント」だ。2022年7月31日に始まった「いこま未来Lab」では、大人や大学生とチームを組み意見をもらいながらチームメンバーと共に以下に示す「ジビエの勉強会」のプロジェクトを計画した。2022年12月11日には一般の人向けに「ジビエの勉強会」を開催した。

②ジビエの勉強会の開催

ジビエの需要を増やす第一歩として、2022年12月11日にジビエの勉強会を開催した。獣害の現状やジビエの味を知ってもらうことで、ジビエに興味を持つ人を増やすことが目的だ。会場は、チームのプロジェクトマネージャーが生駒でカフェを経営しており、その場を借りることができた。チラシ等で呼びかけ、10人の参加者を招くことができた。生駒市農林課の課長と趣味でハンターをされている方を招いた。課長には生駒市で行われている獣害対策について、また、ハンターさんには普段どんな野生動物を獲っているのかなど、ハンターとしての経験を話していただいた。参加者には実際にジビエ料理を食べてもらいたいという私たちの希望が叶い、カフェのオーナーに鹿肉で唐揚げを作っていただき提供することができた。

ジビエの勉強会終了後、アンケート調査をしたところ、6件の回答が得られた。鹿肉の唐揚げは、6人全員が「美味しかった」と回答している。少なくともこの6人に対しては「ジビエは癖がある」という偏見をなくすことができた。実際にジビエ料理を食べてもらえれば偏見をなくすことも可能だ。さらに、6人全員がまた来たいと思うと回答している。6人全員がジビエや狩猟に興味を持ってくれたと推測できる。以上の結果より、今後も「ジビエの勉強会」を開催することでジビエについて学びたい、狩猟をやってみたいと思う人が増加するのではないかと考える。地域復興や獣害問題解決に向けて有効な方法だと考える。



③森庄銘木産業株式会社への訪問

獣害は、農作物への被害に留まらず、林業の場でも重大な問題として扱われている。植えた苗木を食われてしまったり、鹿が角を木に擦り付け表皮を剥がしてしまったりする被害が出ている。私たちは実際に林業に携わる人から話を聞こうと、2023年7月8日に宇陀で林業に従事されている森庄銘木産業株式会社を訪問した。森庄銘木産業株式会社は、SDGs達成を指針に組み込んでいる会社で、その一環として獣害に困っている人とハンターをマッチングするサービス「カリツナギ」を提供しており、私たちの先輩にあたる2022年度3年生の



国際高校の生徒が、森庄銘木産業株式会社を訪れた縁もある。

当日は、森庄銘木さんが生産した木材が使われた家屋を見学したのち、林業の現状についてのお話を聞いた。林業は、環境において重要な要素となる生態系や水資源などに直接影響する産業である。しかし、収入が安定しないなどの理由から林業従事者が減少を続けていたり、山の持ち主の山への関心が薄れ、森林の手入れをおろそかにすることで放置林が増加したりするなど、林業にとって芳しくない状況にある。さらに、日本は森林蓄積に対する伐採量が少なく、伐採適齢期を迎えた木が増加している。いわゆる「木の少子高齢化」が進んでいると言う。お話を聞いた方は、人々の山への関心が薄れている原因として「山と人間の距離が離れている」ことを問題に挙げた。訪問の最後にはどうすれば若者に森林について興味を持ってもらえるかを皆で話し合った。

④ハンターのオンラインインタビュー

いこま未来Labでの活動中、生駒市職や周りの大人から、「ジビエについて調べるなら、この人と話す面白いかもしれないよ」と十津川村でハンターとして活躍されている、20代の女性のことを教わった。十津川村でジビエ専門店「まると」を経営している女性だ。その方はハンターとして野生動物を捕獲し、その肉を加工し、販売している。20歳という若さでハンターをしていることから何か私たちの活動のヒントになるのではないかと、2023年7月10日に、オンラインでお話を伺った。ジビエを調理、販売する上での問題点やジビエを流通させるためにどんな活動をしているのかを聞いた。

興味深かったのは、流通させる上での工夫だった。ジビエは野生動物の肉であるという性質上、安定した供給が難しいという課題を抱えている。彼女は、十津川村で活動されるハンターたちと連携することでこの課題を軽減しているという。十津川村にいるハンターも例に漏れず高齢化していて、「ライフワークとして罠の設置はやりたいが、捕まえた場合の処理は体力や安全面を考えると難しい」という方が多いそうだ。そこに目を付け、高齢のハンターが獲物を捕らえた場合、連絡してもらい獲物を引き渡してもらおうという契約を結んでいるのだという。害獣に指定されている野生動物は捕獲すると自治体から報奨金がもらえるのだが、その報酬は罠を仕掛けたハンターに送られるようにされている。熟練のハンターはその経験値から罠で獲物を捕らえるのが上手いそうで、その技術を活かして肉の供給量を確保しているのだそうだ。

また、ジビエは、仕留め方、加工の素早さなどで肉の味が変わるという問題もあり、「臭みがある」と言われる原因の一つになっている。しかし、「まると」では、捕獲から加工、提供まで自分の管轄下で扱うことができるので、肉の品質は確実に保証できるという。利用している食肉加工場は、食肉加工場に勤務していた経歴を持つ彼女の父親が設立したとのことで、食肉加工のノウハウにも自信があるそうだ。また、ハンターを始めてから大変だったのは、始めて間もない頃に「鹿を食べるなんて野蛮だ」など非難されたことだという。しかし、誰かがやらなくては解決できないという思いがあり、現在も仕事を続けて、ジビエについての偏見をなくそうとしている。私たちもジビエの偏見を持っている方を減らしたいと思った。

4. 結論

農林課職員やハンターなど、現場で獣害対策やジビエの利用に取り組んでいる方から話を聞くことで獣害とジビエの現状について理解を深めることができた。さらに、ジビエの勉強会を開催し、参加者に獣害とジビエの現状について知ってもらうことができた。獣害対策やジビエの流通に尽力されている方との繋がりもできた。この経験を活かし、今後も「ジビエの勉強会」のような楽しく学べるイベントを企画し、ジビエや獣害の現状を多くの人に知ってもらいたいと考えている。そうすることで、将来ジビエの流通や獣害対策を始めるときに人々の理解、協力を得やすくなるはずだ。しかし、ジビエの流通、ハンターの高齢化問題など、獣害問題を解決するための具体的に確実な方法はまだ見つかっていない。そしてこれ

は1人で、ましてや一朝一夕で見つかるものではない。これからも多くの人間がこの問題と向き合い、協力して一歩ずつ解決の糸口を探していく必要がある。

5. 参考文献・出典

「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和3年度)」『農林水産省』

<https://www.maff.go.jp/j/press/nousin/tyozyu/221202.html>, 2023.11.17

「捕獲数及び被害等」「年齢別狩猟免許所持者数」『環境省』

<https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs4/index.html>, 2023.11.17

野生動物保護管理事務所

「平成25年度森林環境保全総合対策事業－森林被害対策事業－野生鳥獣による森林生態系への被害対策技術開発事業報告書」

http://wmo.co.jp/wp-content/uploads/H25wmo_rinya_3.pdf, 2023.11.10

麻布大学野生動物学研究室 高機成紀「シカ守るべき動物？」

https://www.sakuraso.org/_userdata/forum18, 2023.11.10

公益財団法人 日本食肉消費総合センター「育もう！ジビエ」

<http://www.jmi.or.jp/common/download.php/育もう！ジビエ.pdf?id=MTA0NA%3D%3D>, 2023.11.10